

村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』論

— 鐘楼のスプーンあるいは 208 号室の暗闇で光るもの —

小島基洋

ピッポ：スプーン、フォーク、俺のコイン、全部ここにあるぞ！

アントニオ：あのカササギめが泥棒だったんだ。

— 『泥棒かささぎ』 第二幕十二場

1. 『泥棒かささぎ』序曲

千ページを超える長編小説『ねじまき鳥クロニクル』¹は、ラジオから流れる『泥棒かささぎ』序曲の軽快かつ華麗なメロディーで幕を開ける。

台所でスパゲティーをゆでているときに、電話がかかってきた。僕は FM 放送にあわせてロッシーニの『泥棒かささぎ』の序曲を口笛で吹いていた。スパゲティーをゆでるにはまずうってつけの音楽だった。

電話のベルが聞こえたとき、無視してしまおうかとも思った。スパゲティーはゆであがる寸前だったし、クラウディオ・アバドは今まさにロンドン交響楽団をその音楽的ピークにもちあげようとしていたのだ。(1・11)

イタリア人作曲家ロッシーニによる『泥棒かささぎ』序曲は、まさに「スパゲ

¹ 村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』（新潮文庫 2007 年）引用時には巻号と頁数を括弧内に示す。

ティーをゆでるにはまずうってつけの音楽」である。1975年の録音では9分14秒。茹で上がり時間にも丁度よい。しかし、この小説における『泥棒かささぎ』序曲の重要性は、スパゲティーとの相性で済まされる程度のものではない。三部からなる『ねじまき鳥クロニクル』の第一部はその名も「泥棒かささぎ」編であり、第二部以降にも大切な場面でこの曲が登場するのだ。

だが、この序曲をオープニングに配するオペラ『泥棒かささぎ』が、『ねじまき鳥クロニクル』の内容と如何なる関係をもつのかは明らかではない。この小説の第三部は、「鳥刺し男」編（「鳥刺し男」・パパゲーノはオペラ『魔笛』の登場人物）と名づけられているのだが、小説への関与の仕方において『魔笛』と『泥棒かささぎ』は実に対照的である。『ねじまき鳥クロニクル』の大枠をなす「失踪した妻の奪還劇」が、まるで『魔笛』みたいだと赤坂ナツメグは言う。

ナツメグは微笑んだ。「ねえ、それってなんだかモーツァルトの『魔笛』みたいな話じゃない。魔法の笛と、魔法の鐘で、遠くのお城に囚われたお姫さまを救い出す。私、あのオペラが大好きよ。何度も何度も見た。台詞もそっくり覚えている。『国じゅうに知らぬものなき鳥刺し男、パパゲーノとは俺のことだ。』見たことある？」

僕はまた首をふった。見たことはない。（3・126-127）

このように、作中において、二つの物語の類似性²が語られている。それも登場人物の口から。

対照的に、オペラ『泥棒かささぎ』は誰に言及されることもなく、意味づけもはっきりしない。ただ、例によって、主人公トオルが、(わざわざ)その物語

² 『魔笛：モーツァルト』（音楽之友社1987年）p.48-53参照。おそらく『魔笛』と『ねじまき鳥クロニクル』の類似は、ここで指摘される「お姫様（=妻）の救出」という図式にとどまらない。たとえば「お姫様」・パミーナを捕らえているザラストロが彼女に好意をいだいているように、主人公の妻クミコを捕らえている兄・綿谷ノボルにも、一種、性的な思惑がちらついている。

内容自体を知らないと言べるのみだ。物語終盤『泥棒かささぎ』序曲を口笛で吹きながら歩くボーイを、彼が目撃した時のことである。

僕はすぐにボーイのあとを追った。口笛に合わせて銀色のトレイがふらりとふらりと気持ちよさそうに揺れ、天井の明かりをまぶしく反射させた。『泥棒かささぎ』の旋律が何度も何度もまじないか何かのように繰り返された。『泥棒かささぎ』というのはいったいどういうオペラなんだろうと僕は思った。そのオペラについて知っているのは、序曲の単純なメロディーとその不可思議な題名だけだった。……しかし『泥棒かささぎ』は本当にものを盗む鳥のかささぎの話なのだろうか？ もしいろんなことが落ちついたら、図書館に行って音楽事典で調べてみようかと僕は思った。全曲盤のレコードが出ているのなら買って聴いてみてもいい。いや、どうだろう。そのときには僕はもうそんなことを知りたいとも思わないかもしれない。（3・414）³

主人公が『泥棒かささぎ』について知っているのは、序曲のメロディーと題名だけである。しかし、この独白があるからといって、二つの物語が無関係であるとはもちろん言えない。むしろ、「音楽事典」のくだりは、村上が読者に「図書館に行って」関連性を調べてくるよう指示しているようにも読める。村上はきっと何かを企んでいるにちがいない。たぶん。いや、どうだろう。

『ねじまき鳥クロニクル』の翻訳者、ジェイ・ルービンが、オペラ『泥棒かささぎ』をこう見ている。

このオペラが『ねじまき鳥クロニクル』のなかで顕著な役割を果たすのは、その筋が小説の鍵を提供するからではなく、このオペラが触れられそうに触れられず、ほとんどの読者の意識の周縁にあるからだ。序曲の一部

³ 本論を讀了した後でもう一度この引用に戻っていただきたい。村上春樹、恐るべし。

はテレビのコマーシャルで耳にできるし、スタンリー・キューブリックの暴力的な映画『時計じかけのオレンジ』を連想する読者もいるかもしれない。だがトオルにとって「泥棒かささぎ」は、いつまでも、よくわからないものでありつづけるのだ。なじみはあるけれど、意味は把握できないのである。

ルービン氏は読者が「図書館に」行くことに積極的な意義を見出してはいない。それはどうやら、彼と村上の個人的な交友にも原因があるらしい。この続きでルービンは以下のように述べる。

これは村上と「僕」が区別しがたくなる一例なのだが、一九九二年十一月に村上がサンフランシスコで *La Gazza Ladra*（「泥棒かささぎ」）のビデオを購入したとき、私は一緒にいた。どんな話なのかを知りたいと村上は言っていたが、それは『ねじまき鳥クロニクル第一部』を執筆して相当経つてからのことだったのである⁴。

ルービンは、村上がオペラ『泥棒かささぎ』の筋を『ねじまき鳥クロニクル』の下敷きにした可能性に対して否定的である。その根拠として、「村上と「僕」が区別しがたくなる一例」だと断りながらも、村上もトオルと同様、その話の筋を知らなかったことをあげる。確かに、もし（トオルではなく）村上が『泥棒かささぎ』の話を知らなかったとしたら、それを『ねじまき鳥クロニクル』に反映させることは原理的に不可能である。

だが皮肉なことに、ルービンが紹介するこのエピソードこそが、村上が執筆途中で、『泥棒かささぎ』の話を知った証拠だとも言える。村上が『泥棒かささぎ』のビデオを購入したのは、1992年11月の時点とある。ちょうど前月より第一部の連載が『新潮』誌上で始まっている。つまり、本論の最初に引用した物

⁴ ジェイ・ルービン『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』畔柳和代訳（新潮社2006年）p.263

語の冒頭部分は、この段階で世間に発表されている。しかし、連載が終わり（93年8月号）、書き下ろしの第二部と共に出版される94年4月までには、まだ一年半の猶予がある。更に93年末に書き始められることになる第三部にいたっては、基原稿すらない段階である⁵。村上がビデオを購入したのは、一旦書きあがった第一部と第二部を少しずつ改訂している時期なのだ⁶。

ビデオで『泥棒かささぎ』を見た村上は、その物語を『ねじまき鳥クロニクル』の後半部分に伏流させたのではないかと——これが本論で検証する仮説である。

確かに、小説冒頭、主人公が登場した時点では、『泥棒かささぎ』序曲は深い意味をもっていなかったかもしれない。村上は『ねじまき鳥クロニクル』（と後に呼ばれることになる小説）を書き始めた当時をこう振り返っている。

『ねじまき鳥クロニクル』という長編小説がどのような筋を持つ物語になるのか、その時点では、僕にはまったく予測がつかなかったし、またそれについて深く考えることもしなかった。「実際に書き始めればわかるはずだ」と僕は思った。というか、実際に書き始めるまでは、何もわかるまい。それは『ノルウェイの森』を書いたときも同じだった。まず一行目を書く、それが次の一行につながっていく⁷。

村上は、すでに発表していた短編「ねじまき鳥と火曜日の女たち」（『新潮』1986年1月号）の冒頭をもとに⁸、『ねじまき鳥クロニクル』の執筆を開始する。実際、この時点で村上が知っていたのは、トオルが言うように、「序曲の単純なメロディーとその不可思議な題名だけ」だった可能性は十分にある。あるいは、主

⁵ 「解題」『村上春樹前作品集 1990-2000 ⑤ねじまき鳥クロニクル 2』（講談社 2003年）p. 429

⁶ 前掲書 p.423

⁷ 「解題」『村上春樹前作品集 1990-2000 ④ねじまき鳥クロニクル 1』（講談社 2003年）p. 552-554

⁸ 「ねじまき鳥と火曜日の女たち」『パン屋再襲撃』所収（文春文庫 1989）p.171

人公が無意識にこのメロディーを口笛で吹いた時点（1・113）でも、特別な意味は与えていないのかもしれない。しかし、それ以降の『泥棒かきさぎ』序曲の登場シーンには、オペラ本編の物語が、かすかに——いや、はっきりと——反響しているのだ。妻クミコの部屋に出入りするボーイの口笛に耳を傾けてみよう。

2. 208号室の暗闇で光るもの

主人公の前から姿を消した妻クミコ。彼女がいる場所が、夢とも現実ともつかない異空間——208号室——である。この部屋には『泥棒かきさぎ』序曲を口笛で吹く不思議なボーイが出入りする。小説全体で、トオルはこの部屋を四度訪れることになるが、最初の二度はボーイに遭遇することはない。しかし、208号室には、ボーイの到来を期して、巧妙に暗闇が準備されていく。

まずトオルが初めて208号室に紛れ込む場面（1・188-192）を見てみよう。失業中である主人公トオルは、妻クミコを送り出した後、区営プールで泳ぎ、家に戻る。「気が遠くなってしまいそうなほどの眠さ」（1・188）に襲われた彼は、ソファで眠りに落ち、不思議な夢を見ることになる。夢の中でトオルは広いホールのような場所にいる。遠くのバー・カウンターに加納クレタの姿を見つけ、そちらに向かうが、行ってみるとそこにクレタはいない。仕方なくバーテンに「カティーサーク」を注文する。「銘柄なんてべつになんだってよかったのだが、最初にカティーサークという名前が浮かんだ」（1・189）とトオルは言うが、もちろん、村上には企みがある。「カティサーク」の由来は、Robert Burnsの詩“Tam O’Shanter”にある。主人公 Tam を誘惑する魔女の衣服が Cutty Sark（短いシュミーズ）なのだ⁹。カティーサークが出される前に、「顔のない男」によって208号室に連れて行かれたトオルも Tam と同じ運命をた

⁹ Robert Burns, *The Collected Works of Robert Burns*, Vol. II (London: Routledge Thoemmes Press, 1993), 313-23.

どる。そこには加納クレタがおり、彼女はトオルを性的に導いていく。最初に注目したいのは、トオルが208号室に足を踏み入れた瞬間の描写である。

僕は言われるままにそのドアを開けた。中は広い部屋になっていた。古いホテルのスイート・ルームのように見える。天井が高く、そこから古風なシャンデリアが下がっていた。でもシャンデリアの明かりはついていない。小さな壁つき電灯がほの暗い光を放っているだけだ。窓のカーテンは全部きちんと引かれていた。（1・190）

208号室は暗い。往々にしてホテルの部屋は暗いが、それでも「シャンデリアの明かりはついていない」という箇所村上の作為を感じてよい。あるのはただ「壁つき電灯」が放つ「ほの暗い光」だけだ。

トオルが二度目に208号室に入るのは（2・38-43）、妻が忽然と姿を消した日の翌日、再び「暴力的と言ってもいいくらい激しい眠気」（2・38）に襲われた時のことである。

それはこの前の夢と同じ部屋だった。ホテルのスイート・ルームだ。机の上にはカティサークの瓶とグラスがふたつ置いてあった。たっぷりと氷を入れたステンレス・スチールのアイスペールもあった。……天井からは点灯されていないシャンデリアが下がっていた。部屋の中を照らしているのはほの暗い壁付き電灯だけだ。分厚い窓のカーテンもやはりぴったりと引かれていた。（2・38-39）

208号室の様子は一度目の訪問時とまったく変わっていない。照明は「点灯されていないシャンデリア」と「ほの暗い壁付き電灯」だけだ。この部屋でトオルは、「クミコの夏物のワンピース」（2・39）を着た加納クレタに導かれて性的交渉をもつ。ところが、その途中で、ある奇妙な変化が部屋におこる。

ふと気づくと部屋の中は真っ暗になっていた。僕は部屋の中を見回してみたが、ほとんど何も見えなかった。壁付き電灯はいつのまにかひとつ残らず消えていた。僕のからだの上で加納クレタの青いワンピースがゆらゆらと揺れているのが、シルエットのように微かに見えるだけだった。「忘れなさい」と彼女は言った。でもそれは加納クレタの声ではなかった。(2・42)

「壁付き電灯」が消え、部屋が完全な闇に包まれる。トオルは「しっかりと目を開けて」(2・42) 目の前の女の顔を見極めようとする。しかし、部屋の中はあまりにも暗すぎて顔をとらえることができない。おそらく、そこにあるのは、クミコのもう一つの姿なのだ。

僕は彼女のからだの背後でドアノブが回される音を聞いた。あるいは聞いたような気がした。何かがきらりと白く闇の中で光った。廊下の光を受けてテーブルの上のアイスペールが光ったのかもしれない。あるいはそれは鋭い刃物のきらめきだったかもしれない。でも僕にはもう何を考えることもできなかった。(2・42-43)

誰かがドアを開けて入ってくる。暗闇に光が差し込み、何かが光る。その瞬間、性行為は終わり、トオルは夢から覚める。実は、村上が208号室に暗闇を作り出したのは、そこで光る「何か」のためなのだが、これは後ほど説明する。まずは、トオルが見た金属製の物体の正体を明らかにしよう。答えが示されるのは次の来訪時のことである。

三度目の時は(2・132-143)、トオルはひとり井戸の底にいた。考え事をしようと、枯れ井戸の底に下りた際、近所の少女・笠原メイに縄梯子を引き上げられてしまったのだ。トオルは「夢というかたちを取っている何か」(2・132)の中で、ロビーのような場所にいる。テレビでは妻の兄にして宿敵・綿谷ノボルが演説をしている。トオルは「顔のない男」の制止を振り切って、廊下を進

んでいく。すると……

僕はしばらくあてもなくその廊下を行ったり来たりしていたが、やがてルームサービスのトレイを持った客室係のボーイとすれちがった。トレイの上にはカティサークの新しい瓶と、アイスペールと、グラスがふたつ載っていた。僕は彼をやりすごしてから、そっと後をついていった。そのしみひとつない銀色のトレイは、天井の電灯を受けてときおりきらっと光った。ボーイは一度も後ろを振り返らなかった。顎をぎゅっと引いて、規則正しい歩調でどこかに向けてまっすぐに歩いていった。ときどき彼は口笛を吹いた。『泥棒かささぎ』の序曲だった。太鼓連打の入る出だしのところだ。なかなか上手な口笛だった。（2・135-136）

ここでついにトオルは『泥棒かささぎ』を口笛で吹くボーイに遭遇する。ボーイのもつ「しみひとつない銀のトレイ」が廊下の光を反射して「きらっと」光る。彼は208号室の部屋をノックするとその「トレイを持って」（2・136）中に入る。

五分かそこらしてから、やっとボーイが部屋から出てきた。手ぶらで部屋から出てくると前と同じように顎をぎゅっと引いて、もと来た道を帰っていった。（2・137）

ボーイは「手ぶらで」部屋から出てくる。これは「銀のトレイ」を208号室に置いてきたことを意味する。ルームサービスを運んだ際に、トレイを客室に置いてくるのは、あるいは、通常のことかもしれない。しかし、それであれば一層、「手ぶらで」という描写は必要ないはずだ。そこには何らかの意味がある。トオルは、ボーイの姿が見えなくなると、208号室に再び入る。

僕はそっとノブを回してみた。ノブはまわり、ドアは音もなく内側に開

いた。中は真っ暗だったが、分厚いカーテンの隙間からはわずかな光が漏れて、目をこらすと窓やテーブルやソファのかたちはぼんやりと認められた。……リビング・ルームのテーブルの上にカティサークの瓶とグラスとアイスペールがあるのがぼんやりとではあるけれど、見てとれた。ドアを開けたときに銀色のステンレス・スチールのアイスペールが廊下の光を受けて、鋭いナイフのようにきらりと光るのが見えた。僕はその暗闇の中に入り、後ろ手にそっとドアを閉めた。(2・137)

トオルがドアを開けた瞬間、「廊下の光」が内部に差し込み、「銀色のステンレス・スチールのアイスペール」が「鋭い刃物のように」光る。ここから、前回の来訪時に見たものも、ナイフではなく、アイスペールであったことが推察される。トオルがドアを閉めると、再び完全な暗闇が訪れる。部屋の中にいた女の第一声は、「明かりはつけないでおいて」(2・137)である。アイスペールが光ることはもう二度とない。女は再度、念を押す。

「暗いままにしておいてね」とその女の声は言った。

「大丈夫だよ。明かりはつけない」と僕は言った。(2・138)

トオルは暗闇の中で必死に女の正体を探ろうとする。しかし、女は答えない。「いったい私は誰なのかしら？」(2・139)。そして、例によって、性的な誘いをかけ始める。すると突然ドアをロックする音が響く。女は正気に戻り、トオルを逃がそうとする。

僕は彼女に引かれるままに暗闇の中を進んだ。ゆっくりとドアノブが回る音が聞こえた。その音はわけもなく僕の背筋をぞっとさせた。部屋の暗闇の中に廊下の光がさっと差し込むのとほとんど同時に、僕らは壁の中に滑り込んだ。壁はまるでゼリーのように冷たくどろりとしていた。(2・142)

ドアが開いた瞬間、トオルは間一髪で難を逃れる。実はこのタイミングが絶妙なのだ。もしも、トオルが壁に入るのが一瞬遅ければ、「廊下の光」が照らした「何か」を目撃したかもしれない。銀色のアイスペールではない「何か」——そう、ボーイが置いていった「銀のトレイ」を。この時、「銀のトレイ」を見つけていれば、きっと……！

3. オペラ『泥棒かささぎ』

さて、いい加減、前フリが長すぎた。そろそろオペラ『泥棒かささぎ』についての説明をするべきだろう。トオルが言うとおりの「図書館」に行って「音楽事典」を引き、「泥棒かささぎ」の項を見ると以下のような記述がある。

19世紀初頭、イタリアのとある村。女中ニネッタ (sop) は、彼女が奉公している農家の息子ジャンネット (ten) と婚約をしている。彼女は銀のスプーンを盗んだとして告訴され、ニネッタに誘いを断られたポDESTA (bs) が彼女を公判に付して、彼女は死刑を宣告される。彼女が刑場に向かう途中でようやく、本当の泥棒は農家の家に飛び込んできたかささぎであったことが明らかになる¹⁰。

ここでは省略されているが、原典にあたると、かささぎが真犯人であると判明するには、もうひとつの「銀」が関係していることが分かる。銀貨を盗まれた召使いピッポが、かささぎを追跡し、銀製品の隠し場所である鐘楼を発見したのだ¹¹。『泥棒かささぎ』には多くの人物が登場し、複雑な人間模様が描かれている——若い二人の恋愛があり、横恋慕があり、そこに父娘の絆から、一種

¹⁰ 『オックスフォード・オペラ大事典』（平凡社1996年）「泥棒かささぎ」の項参照

¹¹ *La Gazza Ladra/The Thieving Magpie, a Semi-Serious Opera in Two Acts* (Elliot: New York, 1833) Googleブック検索より取得
http://books.google.co.jp/books?id=khcQAAAAYAAJ&printsec=frontcover&dq=thieving+magpie&as_brr=3#PPA105,M1

の嫁姑の問題まで絡む。しかしタイトルにある「かささぎ」を中心に見てみると、物語の核心部分は意外にシンプルであることが分かる。

- ① かささぎが銀のスプーンを盗む→ヒロインに嫌疑→死刑宣告
- ② かささぎが銀貨を盗む→追跡すると鐘楼にスプーンを発見→ヒロインは釈放

要するに、プロットを中心をなしているのは、かささぎが盗んだ銀製品をめぐる①誤解とその②氷解なのである。

トオルがヒロイン・クミコを救うにはどうしたらいいのだろうか。かささぎが盗んだ銀のスプーンを見つけることによってニネッタが救出されたのだったら、ボーイが運んだ銀のトレイを見つけることは、クミコの救出につながるのかもしれない。まずは、もう一度、『泥棒かささぎ』を吹きながら歩くボーイを追跡するのだ。

4. 帰って来た『泥棒かささぎ』

妻の行方は杳として知れない。小説が残り 100 ページあまりに迫った 33 章で、トオルは井戸の底に再び下りていく。そこで「深い泥の層のような昏睡」(3・407) に襲われ、208 号室にたどり着くことに成功する。しかし、そこには誰もいない。電話機は死に、ガラスの内側は乾いて白い埃がたまっている。トオルは廊下に出て、ホテルの中を彷徨う。

どうすればいいのか立ち止って途方に暮れているとき、僕は遠くに聞き覚えのある音を聴いた。口笛吹きボーイだ。音程のしっかりした口笛だった。そんなに見事な口笛を吹ける人間はほかにいない。彼は前と同じようにロッシーニの『泥棒かささぎ』序曲を吹いていた。(3・413)

この章のサブタイトルで「帰ってきた『泥棒かささぎ』」と予告されていたように、トオルは再びボーイ——「泥棒かささぎ」を目撃する。

口笛吹きのボーイは銀のトレイを手にして、そこにはやはりカティサークの瓶とアイスペールとグラスが二個載っていた。ボーイはまっすぐ前を向いて、自分の口笛に自分で聞きほれるような顔つきで、僕の前を足早に通り過ぎていった。こちらには目もくれなかった。（3・413）

トオルにできることは、ひとつ、「泥棒かささぎ」をどこまでも追跡することだけである。「銀のトレイ」をもったボーイは、もちろん、208号室に向かう。ドアをノックし部屋に入る。トオルは花瓶の陰に身を潜める。

ドアが開き、ボーイが出てきた。出てきたとき彼の手には何もなかった。トレイごと部屋の中に置いてきたのだ。彼はドアを閉めると居住まいをただし、また『泥棒かささぎ』を口笛で吹きながら、手ぶらで足早に来た道を引き返していった。（3・436）

ボーイは銀のトレイを「部屋の中に置いて」、「手ぶらで」出てくる。彼の仕事は、カティサークを届けることではない。銀のトレイをせつせと208号室に運び込むことだったのだ。トオルはすぐには208号室に入らず、ボーイの跡を追う。ロビーに出ると、テレビのニュースで、クミコの兄・綿谷ノボルが暴漢にバットで襲われ意識不明であることが告げられる。犯人の特徴から、周りの人々が疑いの目を向けたのはトオルだった。逃げるトオルがロビーから廊下に出た瞬間、すべての照明が落ちる。例の「顔のない男」がトオルを守るために照明を切ったのだ。彼はペンシルライトで足元を照らし、トオルと行動を共にする。トオルはこう尋ねる。

「口笛を吹くボーイのことは知っていますね？」

「いいえ」と男はすぐに言った。「ここにはボーイは一人もいません。口笛を吹くのも、吹かないのもね。もしあなたがどこかでボーイを見かけたのだとしたら、それはボーイではなく、ボーイの振りをした何かです。聞きそびれましたが、あなたは208号室に行きたいのでしょうか。違いますか？」（3・447）

「ボーイではなく、ボーイの振りをした何か」——それは、「泥棒かささぎ」だ。銀製品を208号室にせっせと運ぶボーイは「泥棒かささぎ」なのだ。

トオルは「顔のない男」からペンシルライトを受け取り、一人208号室に入る。いよいよ決着をつける時だ。

男が言ったとおり208号室のドアには鍵がかかっていた。……それから僕はペンシルライトのスイッチを入れ、背後のドアを閉める。乾いた金属音が部屋の中に必要以上に響き渡る。部屋の真ん中にあるテーブルの上には封の切られていない新しいカティサークの瓶と、新しいグラスと、新しい氷の入ったアイスペールが載っている。銀色のトレイが花瓶のとなりで、まるで長い間待ち構えていたように懐中電灯の明かりをなまめかしく反射する。（3・439）

四度目の訪問にして、ついに、トオルはボーイが運び込んだ「銀色の」——アイスペールではなく——「トレイ」を見つける。「長い間待ち構えていた」銀のトレイを。かささぎが盗んだ銀のスプーンが発見されたことで、囚われていたニネットが無罪となり、物語が大団円に向かうように、トオルの銀のトレイ発見は、クミコ解放の予兆であり、物語が終局に向かう合図である。トオルは部屋の中の女がクミコであることを確信し、連れ出そうとする。

「君を連れて帰る」と僕は乾いた声で繰り返した。「そのためにここに来たんだ」（3・462）

クミコは返事の変わりに一本のバットを手渡す。綿谷ノボルを強打した、血と髪のコがついたバットを。その時、ドアがノックされる。

「今度はどこにも逃げないよ」と僕はクミコに言った。「僕は君を連れて帰る」（3・465）

トオルはバットを手にドアのほうに向かう。ドアはゆっくりと開き、誰かが部屋に入ってくる。

その誰かは懐中電灯を用意していた。……光がサーチライトのように部屋の中にあるものをひとつひとつ順番に照らしていった。花瓶の花、テーブルの銀のトレイ（それはまたきらりとなまめかしく光った）、ソファ、フロア・スタンド……。 （3・467-68）

「懐中電灯」の光に照らされた「銀のトレイ」が「またきらりと」光る。トオルは、その男をバットで殴打する（現実世界では、クミコが脳溢血で倒れた兄ノボルの生命維持装置をはずす）。男は血を流し床に倒れる。トオルはソファに座り目を閉じる。壁を抜ける。気がつくと、そこは井戸の底であった……。

クミコはやがて戻ってくる——「尻尾の先が曲がった猫がいて、小さな庭があつて、朝に目覚まし時計が鳴る世界」（3・462）に。二人の生活がもう一度始まる！ そんな予感を残して、物語はようやく幕を下ろす。

最後に、もう一度『ねじまき鳥クロニクル』冒頭に戻ってみよう。

台所でスパゲティをゆでているときに、電話がかかってきた。僕はFM放送にあわせてロッキーの『泥棒かささぎ』の序曲を口笛で吹いていた。スパゲティをゆでるにはまずうってつけの音楽だった。（1・11）

もし、ボーイによって208号室に運ばれる銀のトレイが、かささぎによって

鐘楼に運ばれた銀のスプーンだったとしたら——もし、『ねじまき鳥クロニクル』が村上による『泥棒かささぎ』の変奏であったとしたら——この小説の幕を開けるのに、『泥棒かささぎ』序曲より「うってつけの音楽」などあるだろうか。